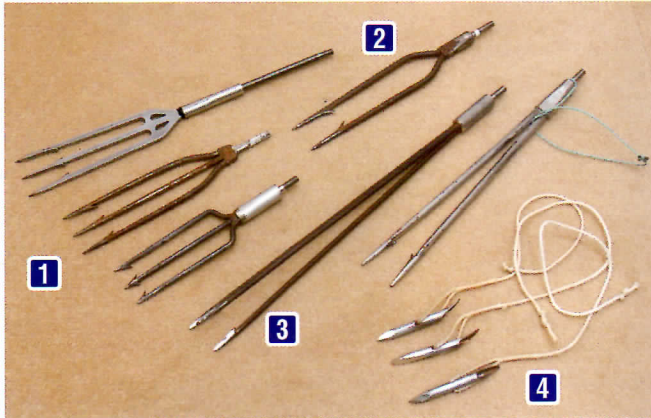


● 銚先のタイプと特徴



【さまざまな銚先】

①の三股の銚先（三本銚先）と、②の二股の銚先（二本銚先）が一般的。貫通力は弱いですが、魚に当てやすい。大型魚を相手にするには、③のバラライザーや一本銚（一本銚先）、あるいは銚先の下に可動式のカエシが付いた「羽根式銚先」などが使われるが、④のチョッキ銚のほうが、突いたあとに魚が暴れても取り込みやすいので、こちらのほうがポピュラーだ。いずれの銚先も、素材には焼きを入れて硬度を高めた鉄やステンレス、チタンなどが使用されている。



【チョッキ銚の先端】

左は3面、右は4面にカットされている。3面のほうが、面と面の角度がより鋭くなるので、刺さりがいい。反面、相手が硬過ぎると刃が鈍りやすい。なお、チョッキ銚を禁止漁具扱いとしている地域もあるので、事前に確認しておこう。



【チョッキ銚の取り付け】

チョッキ銚は、手銚の先端に被せるようにセットし、紐を柄に接続する。銚先を貫通させて柄を引き抜くと、銚先が横を向いてカンヌキになり、抜けなくなる。紐を介することで、魚が暴れても衝撃が柄に伝わらず、身切れなど起こりにくい。

● 自作に必要なパーツ



【ゴルフクラブのシャフト】

ゴルフクラブのシャフトや、スキーのストックなど、廃物を利用すれば手銚を安く作れる。クラブのシャフトは、3～4本を差し込んで繋ぎ合わせ、1.5mほどの長さにし、これを2本作って、継ぎ手で繋ぐ。接着にはエポキシ系接着剤を使えばよい。



【接続パーツなど】

継ぎ手や尻手、銚先部分の接続パーツは、「矢野工房」(<http://www.geocities.jp/koisan7/>)などのスピアフィッシング専門ショップで手に入る。矢野工房では、シャフトの径に合わせて製作することも可能。

【その他の小物類】

自分が捕獲した魚を吊るすため、また、船や岸から自分がどこにいるかを分らせるために「フロート」が必要。道具のスペアや飲料水なども、これにぶら下げておく。

できるだけ目立つよう、黄色やオレンジといった派手な色で、大きめのものがお勧めだ。ただし、大き過ぎると水の抵抗を受けて泳ぎを妨げる。25×25×50cm程度の発泡材を加工して作るのが一般的だ。ほかに、ボートのフェンダーやスカリなどに付いているウキを流用することも可能。国内・海外のスピアフィッシング専門ショップでも販売されている。

捕った魚は、「ストリンガー（エラ通し）」に掛けてフロートに下げる。魚が小型なら、スカリなどでも代用可能だが、これを使っていると貝などを獲る密漁者と間違われやすく、泳いでいる際に網が岩場などに引っ掛かって事故の原因になる。

そして最後に「ダイビングナイフ」。魚

を締めるだけでなく、水中に沈んだ釣りイトや網などに引っ掛かったとき、それらを切って脱出するためにも使われる。ナイフが脱落しにくいシース（鞘）も必需品だ。

手銚（スピア）の選び方

スピアフィッシングで使用される銚は、銚を突き出すためのゴムが付いた、いわゆる「手銚」だ。手銚にはさまざまな種類があり、既製品ばかりでなく、自作する愛好者も多い。通称「青ヤス」と呼ばれる、海辺の釣具店などで売られている全長1.5m程度のヤスでも魚突きは楽しめるが、全長がより長く、性能のいい手銚を使うことで、突ける魚の幅が格段に広がる。

シャフト（柄）の素材はステンレス、アルミ、カーボンが一般的で、昔ながらの竹を愛用する人も多い。ステンレスは重量がかさむものの、強度は高い。アルミはそれより軽い、強度的には一歩譲る。近年、ポピュラーなのは、軽くて強度の高いカーボン。ただし、価格は高くなる。最後に竹

は、自然素材であるため、思い通りの重量・浮力を実現するのが難しいが、独特の味があるのが魅力だ。

シャフトの長さは、ベテランのなかには4m以上のものを使いこなす人も多いが、3m前後が一般的。多くの製品が、携行しやすいよう、2本継ぎになっている。

銚先（銚の先端）には、一本銚、二股、三股、バラライザー、チョッキ銚（岬銚）などがある。二股、三股のほうが、一本銚に比べて貫通力が弱い、魚に当たる確率が高くなるので、ビギナーに向いている。なお、一本銚のメリットは、チョッキ銚も兼ね備えているため、一本銚はあまりポピュラーではない。

バラライザーは、2～3本の銚先が先端に向かって広がるように付いている銚先で、魚が抵抗すると内側に絞られて、より強く締まるのが特徴だ。

チョッキ銚は、魚を貫通すると銚先が柄の先端から抜け、横になってカンヌキの役割をする。銚先には紐が付いており、魚が